

## 時代が追い付けなかった作家 ーヴァーン・スナイダーの脱植民地主義テキストー

渡久山 幸功\*

### A Writer his Contemporaries Couldn't Catch up with: De-colonialist Novels by Vern Sneider

TOKUYAMA Yukinori

#### 要 旨

この論稿は忘れ去られたアメリカ人作家ヴァーン・スナイダーの作品研究の重要性を指摘する論考である。米軍統治時代の沖縄を世界中に広めた『八月十五夜の茶屋』の原作者による米軍占領下の沖縄や台湾を舞台にした作品をその当時では極めて珍しい脱植民地主義小説と捉えて彼の文学作品の正当な再評価と正確な事実確認と充実した研究環境の整備の必要性を論じた。

キーワード：ヴァーン・スナイダー、脱植民地主義文学、米軍占領政策、米国による経済復興

#### はじめに

2022年は戦後27年の米軍統治から沖縄が日本に復帰してから50周年の節目の年に当たるが、1945年の終戦以来、77年間も在沖米軍基地は存在し、沖縄本島の面積の20%弱を占有している。この事実が示すのは、米軍基地が現代沖縄社会にとって大きな関わりを持つ組織であるということだ。一方で「太平洋の要石」として地政学的に重要な地域であると主張されているが、米国市民は沖縄の事をほとんど知らないか、たとえ知っていても彼らの沖縄のイメージは「戦争」、「米軍基地」、「空手」に集約される。米国民が沖縄を知らないという状況は戦後77年間続いてきたが、実は、沖縄の名が米国内のみならず、世界中に広まった時期があった。それは終戦直後の米軍統治下の沖縄を舞台にした戯曲*The Teahouse of the August Moon*（『八月十五夜の茶屋』）が、ニューヨークのブロードウェイで前代未聞の成功を収め、

\* 沖縄大学地域研究所特別研究員 yukinoritokuyama@gmail.com

そのハリウッド映画版が大ヒットした1950年代である。

原作者のヴァーン・スナイダー (Vern Sneider) は1945年の沖縄戦上陸のIceberg作戦に米国軍政府要員として参加した。1946年4月に米国陸軍を除隊し、6年後の1951年に、彼の沖縄戦体験を題材にした処女作『八月十五夜の茶屋』がベストセラーとなった。この小説によりスナイダーは、有望な新人作家に与えられるFriends of American Writer's Awardを受賞する。この小説は劇作家ジョン・パトリック (John Patrick) によって戯曲に翻案され、1953年にブロードウェイで初演されて以降、1956年まで1,067回の公演を記録する大ヒットとなった。(1960年代、1970年代を通して、高校や大学のアマチュア演劇クラブに人気の高い作品の一つとして知られていた。) 1956年にはマーロン・ブランド (Marlon Brando) がイエローフェイスの異相で主役の沖縄人通訳Sakiniを演じた映画版が上映され、その短縮バージョンとして1962年にはテレビドラマとしてオンエアされている。1970年にはブロードウェイでミュージカルとして再び公演された。

しかし、小説の原作者であるヴァーン・スナイダーはアメリカでは忘れ去られた作家となっている。1951年から60年の10年間でベストセラー小説を3作品出版し、また近年になってイギリスの出版社から2作品が再出版されている事実にもかかわらず、彼の名前は、ほとんど知られていないといっても過言ではないだろう。その要因として、彼の作風及び筆致が洗練されておらず、彼と同時代のアメリカを代表する作家、例えば、アーネスト・ヘミングウェイ、ジョン・スタインベック、J. D. サリンジャーのような一流作家の芸術性・審美性に見劣りするということもあると思われるが、米国民の中に彼の名が忘れ去られている最大の原因は、彼の同時代の作家と比較して、スナイダーが革新的な先見性があり、第二次世界大戦後およびそれに続く冷戦下の米国民の時代風潮・イデオロギーにそぐわないという事実があったからだとも思われる。ポストモダン小説研究者のLarry McCafferyによれば、『八月十五夜の茶屋』は、Joseph Hellerの軍隊組織の不条理を描いた*Catch 22* (1961) やKurt Vonnegut Jr.のSF反戦小説*Slaughterhouse-Five* (1969) のような第二次世界大戦をテーマにした小説より10年以上も前にポストモダ的な文学修辞や方法論を採用しているが、出版された1950年代には読者も批評家も適切な批評枠組みが欠如していたため正当な評価がされてこなかった、と指摘している。

[O]ne of the reasons for the critical neglect of *The Teahouse of the August Moon* is a lack of context—that is, despite being a relative commercial success when it appeared, readers and critics simply didn't have the proper critical framework, or vocabulary, to recognize and respond to what Sneider had accomplished; instead, more reviewers at the time predictably fell back into formulaic descriptions of the novel—most commonly some variation of the notion that the novel was a “warm-hearted, often uproarious, gentle satire.”

Reading *Teahouse* today, however—in the aftermath of not just Heller and Vonnegut, but also of absurdist theater and black humor, . . . of the rise of fabulism, magical realism, fantasy and other postmodern formal methods that critiqued, debunked, and also expanded our notions of traditional “realism”—it seems obvious that while the term “gentle satire” no doubt applies to the film and theater versions of *Teahouse*, it most definitely doesn’t do justice to Sneider’s novel. (McCaffery “Riding a Galloping Horse” 78-79)

McCafferyが指摘する伝統的なりアリズム小説の地平を拓いたスナイダーのポストモダン的な修辞や実験は興味深い分析であり、原作が「やさしい風刺」の物語とひとくくりに評価されるのは不十分だという見解には首肯できるが、この作品が正当な評価を受けなかった最大の原因は、「批評フレームワークの不在」以外にもあると思われる。それは、スナイダー自身のアメリカ民主主義への全幅の信頼から導き出される経済後進地域における真の民主主義の確立、経済成長による脱植民地化、及び植民者側の異文化尊重・受容の必要性である。このアメリカ民主主義への信頼はアメリカ人読者に受け入れられそうだと思うのだが、実際には非常に複雑な問題が絡んでいる。また、敗戦国の文化や慣習を受容するということは、戦勝国のアメリカ国民にとってかなり困難な体験となるであろう。多文化主義（異文化尊重・理解）という概念が誕生する数十年も前の文脈を考慮すれば、米国民のメンタリティは自然な反応かもしれない。

これらのイデオロギー的な要因は、第二次世界大戦後の勝利から数年しか経っていないアメリカ合衆国政府と市民には理解を超える概念であろう。都合の良い部分だけを利用し、残りは無視する、あるいは、「見ってから定義しないで、定義してから見る」(Walter Lippman 111)という人間性の典型的な例だと思われる。アメリカが支配する地域の脱植民地化をテーマにしたスナイダーの小説は、アメリカ民主主義、神話、理念、文化をやんわりと否定することを暗示しているのではないだろうか。

一方で原作に対する「やさしい風刺」という評価もあながち誤った評価ではない側面もある。HellerやVonnegutの小説のような鋭利な米政府や米軍批判はほとんどなく、スナイダーは基本的に軍隊の存在を肯定しているからである。彼の再婚相手であり未亡人のジュン・スナイダー (June Sneider) は、スナイダーは生前、米陸軍に所属したことを大変誇りにしていた、と筆者とのインタビューで語っており、反軍隊という立場ではなかった。(2015年9月にジュンとインタビューする機会を得た。スナイダーは非戦闘員として沖縄戦に参加する前にアリューシャン列島での日本軍との戦闘体験があり、時折、夜中に激しくうなされることがあった、という。彼の戦場PTSD的な症状を回想していた。)

### *The Teahouse of the August Moon* (1951)

映画版の影響だと思われるが、沖縄の人々による原作『八月十五夜の茶屋』の評価は芳し

くない。映画が米軍統治下の沖縄の現実をほとんど反映しておらず、沖縄文化に対するいい加減な理解（日沖文化の混同など）が沖縄側の反感の原因であるが、映画に対するこのような反感が原作の評価に悪影響を与えてきた。上記の理由で映画自体も偏見を持たれ正当な評価がされなかったことも不幸な歴史ではあるが、映画と同じ内容だと思い込み原作が読まれてこなかったということも沖縄人によるスナイダー評価が芳しくなかった原因の一端である。

これまでこの作品の正確な調査・分析がなされてこなかったため、信ぴょう性のない憶測によって『八月十五夜の茶屋』関連のエピソードが流通していき、数少ない学術論文も誤った資料に基づいて分析されてきた。例えば、パトリックの翻案では、ペンタゴン型の学校を建設する代わりに、茶屋を建設する設定であり、映画公開当時、子どもたちの教育に熱心だった沖縄の大人が強く反発した。教育よりも娯楽（サツマイモの焼酎泡盛の製造や芸者の文化を反映する茶屋建設など）を優先するTobiki村の住民の姿勢は許容しがたいことだろうが、小説では学校と茶屋の建設は同時並行で行われる。主に教育・福祉担当だったスナイダーが学校建設を軽視するはずがない。（戦時中にもかかわらずアメリカ側が学校建設に積極的だったのは子どもたちが戦火に巻き込まれないように、というのが最大の理由だった。1945年9月から1946年3月の朝鮮半島任務で、彼はソウル近郊の京畿道行政区内に550の学校を設立することに従事していた。除隊時にスナイダーはthe Bronze Starを授与されている。Sneider “Career Account”）

また、翻案では芸者は一人のみ、Lotus Blossomだけが登場し、Captain Fisbyとの恋愛関係がほのめかされている一方、原作ではFisbyに「お土産」として送られてきたのは、2人の芸者（the First FlowerとLotus Blossom）であり、Fisbyとの恋愛関係は描写されていない。つまり、原作では芸者のアジア女性の魅力的なイメージは極力排除されている。つまり、パトリックはアメリカ人男性が東洋人女性に抱く性的想像を刺激することに成功したが、小説ではFisbyはthe First FlowerとSeikoの結婚を承認する仲人的役割という立場から異文化を観察している。

さらに沖縄で流布している神話がある。それは芸者のモデルは料亭「松の下」を再建した上原栄子であるというものである。彼女は戦前那覇市辻でジュリ（芸者）をしており、終戦後、辻遊郭の復興を陳情したが、人身売買を示唆する遊郭の復興は米軍占領政府を混乱させた、というのである。多くの文献でこの逸話を「事実」として受け入れているが、これは大きな誤解である。スナイダーは、1945年9月に米国陸軍の命令により朝鮮半島への赴任のため離沖しているが、上原が辻遊郭の再建を訴えたのは翌年の1月であり、彼がこの上原の行動を直接見聞きした可能性はない。

スナイダーの故郷にあるモンロー郡歴史博物館（Monroe County Historical Museum）に所蔵されているスナイダー・セクションの資料の中に、ニューヨーク・ブロードウェイでの『八月十五夜の茶屋』の大成功により開かれたお祝いのスピーチの原稿が残っていた。その原稿によれば、スナイダーは担当の桃原収容所の昼休憩で、故郷の友人に手紙を書いている時に、その日の朝、指揮官から聞いた面白いエピソードをたまたま思い出したという。

Just after lunch one noon in this little village, I sat down to write a letter to “Wink” and Jim Salow. In casting around for something to write about, I happened to remember an incident that my commanding officer had told me about that morning.

He had been on an inspection tour of one of our northern villages. This village had three geisha girls. And the Captain, instead of finding the village officials hard at work, found them drinking tea and talking with the geisha.

I had always thought that there was a story in the occupation of Okinawa. And now I knew that I had a starting point in the three geisha and the village officials who would rather talk with them than work.

But those were busy times on Okinawa. We were concerned with feeding the people and sheltering them. And there was no time for fiction. After Okinawa came Korea. Again there was no time. So the story idea was all but forgotten.

In the Spring of 1946, I came home again to Monroe. The thing I wanted to do more than anything was write. So, once more in casting around for something to write about, the idea of the three geisha came . . .

In those days I used to make the coffee circuit . . . and I’d sit for hours over coffee, trying to make this incident or the geisha into a story. But I couldn’t get it. And as far as the *Teahouse* was concerned, a couple of years slipped away from me. (Sneider “Untitled Speech Draft”)

The place was Okinawa. The village was Takaesu. And the problem as this: what do you do when you have three geisha girls under your command? Especially, what do you do when your welfare, agriculture, sanitation and every other department wants to sit around, sip tea and talk with the geisha? The problem really belongs to a Lieutenant named Keene, who commanded the village of Takaesu. The other Lieutenant named Sneider of Tobaru village merely listened rather wishfully. (Sneider “For Gene Keene”)

これらのスピーチや手紙の内容を精査すると、高江洲収容所で地元の収容所責任者が仕事もせずに芸者3人とお茶を飲みながら話をしており、担当官Lieut. Geeneが呆れていたというエピソードである。米軍の沖縄占領体験は小説の題材になる可能性があることを感じて、特に芸者とお茶を飲むことを優先して仕事をしない沖縄人男性らのエピソードを物語に組み込もうとしたが、沖縄での任務は多忙を極め、そのうち朝鮮半島に派遣されたため、物語を

構想する暇もなく、芸者のエピソードを完全に忘れていたという。1946年の春に陸軍を除隊後、執筆活動に取りかかったとき、あの芸者のエピソードが頭に浮かんできたのだが、どうしてもうまく書けなかった、と回想している。これらの内容から上原栄子による辻遊郭の再建のエピソードをスナイダーが見聞きしたという可能性はないと思われる。しかし、原作の芸者のモデルが上原栄子であるという神話が浸透していき、今ではこの神話が「真実」となってしまった感がある。(上原は高江洲収容所ではなく石川収容所にいたため、上記の3人の芸者の一人でもないだろう。誤情報をうのみにして執筆されている学術論文は結構多いが、最も顕著な例がJohn Junkerman による“Postwar Okinawa Through American Eyes: Thoughts on *The Teahouse of the August Moon*”という論文であり、上原がLotus Blossomのモデルであるという説に全面的に依拠した論考となっている。)

この独り歩きした神話をもとに事実を捏造した文献さえある。それは『終戦後の沖縄文化行政史』(川平朝申著1997年)の下記の記述である。

GHQのフォックス参謀次長を視察団長とする米国々会議員と新聞記者団の歓迎演芸会は、[1947年]二月十四日、北中城村瑞慶覧のライカムと呼ばれていた米軍司令部の構内で予定通り開催され、松竹梅の三劇団による合同出演という戦後初の多彩なプログラムとなった。(中略)注目すべき成功は、代役の『カメちゃん』[上原栄子]のあでやかさであった。名渡山[愛順]氏らにも見せてやりたかったほどの美貌は、若い米軍将校たちを完全に魅了した。

その将校のなかに、東洋人が花を女の名にすることに興味をもった文学将校がいた。のちにニューヨークのブロードウェイで上演して成功した『八月十五夜の茶屋』の原作を書いたシュナイダー少佐である。登場する女性に桜、梅、桃、花、藤、菊、百合、すみれなどをつけているが、女主人公には「ロータス(蓮)」と名付けているのは、この日のカメちゃんの舞台姿にヒントを得たらしい。(川平 89-90)

上記の記述は、スナイダー自身の伝記とは符合しない。モンロー郡歴史博物館所蔵の資料によれば、彼は朝鮮半島での民政官の任期完了後の1946年の3月にアメリカ陸軍から除隊している。その後、就職せず、軍から支払われる週2ドルの給金で経済的に不安定な生活を強いられながらも作家修行に励んでおり、彼の夢を静かに応援した両親に感謝していた。(先に引用した“Untitled Speech Draft”にあるように、故郷で作家修行の時期であった1947年にスナイダーが陸軍少尉として沖縄に滞在していたはずがないのである。また、作家としてめども立たないこの時期に、沖縄を再訪することは経済的にもあり得ないことだっただろう。)

また、川平の同著にはCaptain Fisby のモデルはThomas H. Murfin (初代米国沖縄領事1952-54) と記している(川平 375)。D. Robert Eldridgeの報告“Report from Naha: The U.S. Consuls General and the ‘Okinawa Problem’ in the 1950s”を読む限り、確かに

Murfinは沖縄戦当時米国海軍政府に所属し、沖縄で収容所を監督する仕事に就き、住民から感謝されていたようで、Fisbyのモデルにふさわしい人物である (Eldridge pp. 6-7)。しかし、筆者が行ったインタビューでジューンは、生前スナイダー本人はFisbyのモデルは存在しないと言っていた、と証言している。上記に引用した“Untitled Speech Draft”でも “But first may I point out that I’m not the Captain Fisby of the book. Captain Fisby is strictly fictitious and no one like him existed. However, nearly every village commander on Okinawa faced the same problems that Fisby faces.” と記されている。上記のことから、Fisbyのモデルは、スナイダー本人でもなく、厳密な意味で、モデルは存在しないと思われるが、Murfinによる思い込みが活字化されれば、誤った情報を読者が鵜呑みにしてしまうことが懸念される。(原作の主要人物のモデルに関しては、拙著「沖縄を描いたヴァーン・スナイダーの故郷を訪ねて」[*Southern Review* No.30, 65-66]を参照。)

### *A Pile of Oyster* (1953)

1952年、スナイダーは第2作のための資料を集めるために台湾を訪問した。『八月十五夜の茶屋』の成功により、出版社が旅費を負担してくれることになったからだ。3ヶ月の滞在中、彼は台湾を旅し、多くの現地の人々に出会い、取材を敢行した。これは彼の2度目の台湾訪問である。一度目の訪問は、終戦後1945年秋から46年春までの半年間、韓国で任務についていたスナイダーは、そこで中国人と知り合い、除隊後に台湾沖の澎湖諸島に水産工場を建設する計画を立てていた。しかし、現地に到着してみると、あまりにも絶望的な状況であったため、その計画を実行に移すことはできなかった。中国の友人たちは中国本土に帰り、スナイダーは1946年4月にモンローに帰国していた。ノートルダム大卒の彼は、沖縄に派遣される前にプリンストン大学で軍政府プログラム研修を約半年間を受けているが、それは当時日本の植民地であった台湾への赴任を念頭に中国と台湾について学び、基本的な中国語会話を習得する、というものであった。しかし、台湾進攻ではなく、沖縄進攻へとアメリカ軍の作戦は変更されたため、台湾へ赴くというはなかったが、彼の台湾への関心は強く残っていたと推測される。1953年に出版された*A Pail of Oysters* (『牡蠣一桶』)の初版は15,000部が完売した。批評家からも好評を博し、同年に出版された本の中で最も優れた50冊のうちの1冊に選出されている。

『八月十五夜の茶屋』と比べると、『牡蠣一桶』は、非常に悲しい物語であり、1945年に日本の植民地支配終結後の1950年前後の国民党政権下の台湾を描いた政治小説である。1947年に中国大陸から送り込まれた国民党軍が台湾の現地人から貴重品を略奪する事件が多発し、少なくとも1万人の台湾人が殺された二・二八事件を目の当たりにした台湾人は、その腐敗、略奪、暴力から戒厳令下の国民党を非常に恐れていた。物語には3つの筋書きがあり、(1)客家人とペポファンの混血である19歳の男性、リリウ (Li Liu) は、国民党の「救国軍」のメンバーによって盗まれた一族の守り神の額縁を取り戻すという使命を持っている。(2)プレ

シャス・ジェイド (Precious Jade少女) とディディ (Didi少女の実の兄) は、義父から逃げている。プレシャス・ジェイドはこれ以上娼婦として働かせられることを拒み、そこでディディは妹を救い出し逃亡したため、義父は二人の行方を捜している。(3)国民党政権とそのメディア報道に懐疑的なアメリカ人ジャーナリスト、ラルフ・バートン (Ralph Barton) は、台湾の真実を書こうと躍起になっている。彼はやがて地下組織と出会い、アメリカ国民に台湾社会の実情を記事にするよう懇願される。プレシャス・ジェイドとディディは国民党の警察に捕まり、義父が彼ら二人を共産主義者だと言いがかりをつけた罪で処刑される。

この小説の中でアメリカのフォルモサ (台湾) への援助は、圧政的・非民主的な国民党政権を支援することではなく、現地の人々に効果的に届くようにすべきである、とスナイダーは主張している。Santha Rama Rauによれば、「ヴァーン・スナイダーは政治的不公正に対する鋭い感覚を持っており、確かに彼は台湾の人々に対して多大な愛情を注いでいる。(国民党政権下での) 行動、暴力、残忍性を提供してくれる」(“Vern Sneider has an acute sense of political injustice, and certainly he writes with enormous affection about the Formosans. He provides us with a great deal of action, violence and brutality” [Rau 4])。沖縄と台湾に関する学術書を出版したGeorge H. Kerrに宛てた手紙によれば、スナイダーは台湾の政治状況を反映した真実の物語を創作するという並々ならぬ決意を持っており、『牡蠣一桶』の原稿の一部に対する編集者の反応(衝撃と期待)に満足していたようである。

I (Sneider) think this novel (*A Pail of Oysters*) will blow the roof off things, Mr. Kerr. My view point will be strictly that of Formosa people, trying to exist under that [KMT] government. Certain editors who have seen the outline and sample chapters have termed it the most powerful thing they have ever read, which means this to me---that I'm on the right track. And that, maybe, in my small way, I can do something for the people of Formosa. (Sneider cited in Benda. “Empathy and Its Others” 52)

スナイダーが「フィクションを通してアジアの絶望的な状況を明るみに出す」ことを意図していたため、『牡蠣一桶』が1950年代の台湾の実情を描いていることは間違いなく、この物語は、中国本土の共産党に反対だからという理由だけで国民党政権を支持してきたアメリカ政府を批判する、極めて政治的な内容になっている。蒋介石率いる国民党の台湾政策への辛辣な批判的な描写は、反共政策をとるアメリカ政府当局にとって不快に映ったのは当然だろう。当時、米国合衆国広報文化交流局中国支部局長であったJohn C. Caldwellは、この小説を「徹底的に不誠実な本」(“a thoroughly dishonest book”: Benda “Introduction” [xvii]に引用) とさえ考えていた。

一方で、多くの批評家はこの作品を高く評価していたことも事実である。後者の批評家ら



は、物議をかもし彼の物語にショックを受けつつ、同時に台湾で起こっていた国民党の悪行を明らかにしたスナイダーの大胆な勇気を賞賛している。彼がフィクションという形で露呈した不都合な真実は、それこそ米国当局が激怒した理由でもある。マスメディアは当局によって操作されるケースもあるが、フィクションは表現・思想の自由の下、検閲を回避するという力を持っている。「スナイダー氏は、他の多くの登場人物の周辺の悲劇的な（しかししばしばユーモラスな）物語を描くことでプレスリリースに書かれた数百万の言葉よりも鮮やかに台湾のイメージをアメリカ人読者に与えてくれる」（“Wrapping a tragic (yet often humorous) story around these and many other characters, Mr. Sneider gives his American readers a more vivid picture of Formosa than all the millions of words in press releases have done.” Jackson 27）。この小説は、アメリカ政府が共産主義の拡大を防ぐために支援している台湾の混沌とした無秩序な社会と政治を読者に啓蒙する役割を果たしたが、同時に国民党下の台湾では禁書扱いとなった。

アメリカの外交政策に対するスナイダーの批判的なスタンスは、まったく新しいものではない。『八月十五夜の茶屋』と同様、『牡蠣一桶』でも、アメリカの支援は権力者や統治者のためではなく、現地住民のためにあるべきだ、という基本的なメッセージが根底にある。スナイダーが、台湾、韓国、沖縄などの貧困地域へのアメリカの支援を決して否定していないのは、これらの地域が外国からの援助なしに経済的に自立することは現実的にありえないと考えていたからであろう。アメリカの経済・財政支援が戦後必要であったことは彼にとって極めて明白であるが、彼のようなアメリカ人にとって、アメリカの経済援助が貧しい市民から搾取するような組織を助けることは許されないことであった。国民党支配下の台湾における深刻な矛盾は、多くの元共産主義者が国民党政府を占有することになり、「共産主義と戦うために・・・共産主義の手法」（“to fight communism . . . with Communistic techniques” *Pail* p.140）を採用していることである。したがって、アメリカの政治介入・関与は、必要不可欠であっても、援助を必要としている地元住民に届かない、あるいは不十分であるという非常に複雑な問題をストーリーに組み込んでいる。

台湾の情勢を忠実に伝えるというスナイダーの誠実な願いが、この本の初期の商業的、批評的成功にもかかわらず、彼の反国民党の物語に不満を持つ政治的分子によって否定されたことは非常に残念なことであった。さらに、台湾政府の命により、多くのアメリカの公共図書館や大学図書館からこの小説が紛失したという噂もある。彼はファンへの手紙の中で、その無念さを告白している。

In an attempt to discredit the book [*A Pail of Oysters*] an American official wrote to someone over here that, in effect, I was on Formosa about two weeks, stayed with some British people, never got out of their house or out of the Friends of China Club. The fact is, I was on Formosa, talking with people in all walks of life

. . . I'm afraid my writing about Formosa is over, at least for the time being. I have been branded 'an unf [ri] endly writer who distorts the truth.' So with that label, can't you imagine my walking into a Chinese Nationalist Consulate and getting a visa. (Sneider cited in Benda 'Introduction' xviii)

アメリカ政府高官からの嫌がらせや真実を捻じ曲げる作家としてのレッテル貼りなどに悩み、台湾関連の作品を書くことはないだろうという彼の深い落胆が目に見え告白である。この小説が優れた作品にもかかわらず認知度が低いことは極めて残念であり、正当に評価されていれば、スナイダーの作家人生は大きく変わっていただろう。

### *A King from Ashtabula* (1960)

『八月十五夜の茶屋』の批評的・商業的大成功と『牡蠣一桶』の極めて不当な評価と屈辱的な扱いという両極端な結果からスナイダーは何を学んだのだろうか。1953年に後者の作品を出版した後、短編集*A Long Way from Home* (1956) の発表以外に目立った活動は見られなかった彼だが、1960年に*A King from Ashtabula* (『アシュタビュラからの王』) を出版した。先の2作品の評価を考慮すれば、この作品は極めて自然な反応から生まれた作品と言えるかもしれない。台湾の民主化問題から離れ、再び米軍沖縄占領を題材に取り上げ、実体験ではなく完全な想像の産物を作品化したものである。この作品は米軍占領下の架空の島 Nakashima Islands を舞台にしており、沖縄と台湾の間に位置するという設定である。しかし、人名、地名、歴史、文化、習慣、言語、米軍占領など沖縄と類似する箇所が多いことから、この諸島が琉球・沖縄をモデルにしたことは疑いがない。

物語は、米軍統治下の Nakashima Islands で行われた独立に関する住民投票から始まる。米軍将校は、現地の人々が民主主義体制の下で自由を享受していると思込んでいたが、驚いたことに、島民は民主主義ではなく君主制を選択する。米軍組織が激しく動揺する中、島民たちは、アメリカの大学へ留学するためにオハイオ州に派遣された Kenji Nakamura という正統な王族の後継者を見つける。帰郷した彼は、340年間の「中断」を経た Nakashima Islands の国王になることを承諾し、王国の経済再建に奔走し始める。そして、多くの産業を振興し、国が抱える多くの問題を解決するための計画を立て始める。国王とその補佐官は、Nakashima Islands が王国（君主制）になることに関して、社会主義や共産主義になることを懸念する米国人軍人将校らを説得することに成功する。また、Nakashima Islands ではまだ銀行制度が確立されていないため、住民同士が金銭的に助け合う相互貸借組合を推進する。（模合制度を活用してアメリカから輸入した子豚を買い、成長したら売る。）また、戦後、自由意志に基づかないという理由で禁じられていたお見合いも再開させる。米連邦政府からの2,000万ドルの財政援助と、米軍将校の妻たちによる養鶏への出資により、王国の経済は徐々にではあるが、堅実に成長していく。国王は若い独身者に出会いの場を提供するため、

「無縁祭（お見合い祭）」を開催する。この祭りで、国王は同じくアメリカに留学していた Debbie Shizu Nakasone（竹島公爵）と婚約をする。王国の経済政策が順調に軌道に乗り始めたところで、物語は終了する。

Nakashima Islandsが米民主主義を否定する投票を行うなど、米国人にとっては非現実的で納得しがたい設定だが、スナイダーのメッセージは、『八月十五夜の茶屋』と同一のものである。つまり、米軍が貧しい地域に留まる限り、財政援助は経済復興に必要である、というものである。しかし、イデオロギー問題が絡んでいるため、『アシュタビュラからの王』は、米国人読者にとって受け入れがたいテキストであるといえるだろう。沖縄人の人権を侵害することなく、地元の経済状況を改善するために誠実に援助しない限り、米軍統治は地元の人々から支持されるほど民主的ではないことをこの物語は示唆している。同時に、この小説は、沖縄住民に脱植民地を希求する独立運動を起こすことを示唆するメッセージがあるかもしれない。主人公をNakashima人（つまり沖縄人・非アメリカ人）と設定したところにスナイダーの挑戦が伺われ、沖縄文化の正確な描写から彼が英文による沖縄関連の著作や雑誌などを熟読して創作したことがわかる作品であるが、スナイダーが沖縄を再訪できなかったことは非常に残念である。（彼は1952年に台湾を訪問した際に、沖縄ではなく、香港に向かっている。1970年代に雑誌の取材として、沖縄訪問が計画されていたようだが、その時期に取得したと思われる彼のパスポートにはアメリカを出国した記録はない。）

## 結語に代えて

これらの作品を通して、スナイダーは土地や労働力を軍事的に搾取されることによって米軍占領統治の被害を受けている沖縄県民に寄り添っていること、かつ、米国政府から財政的、政治的に支援を受けている国民党政権が政治的腐敗を引き起こしたため、人権を侵害されていた台湾人に共感していたことが分かる。さらに彼は、米軍の沖縄駐留は、米軍管理者が主張するほど地元沖縄の人々にとって有益でなかったことを既に見抜いていたようだ。スナイダーは米軍が沖縄を使用する限り、友好的で優しい沖縄県民を援助することはアメリカの責務であるべきだと主張しているように思える。

『八月十五夜の茶屋』では沖縄戦のシーンはなく、『アシュタビュラからの王』では軍事訓練や米兵の犯罪、軍事関連の事故などは一切描かれていないため、沖縄を舞台にした作品はいずれもファンタジー調の作風である。したがって、ポストコロニアル研究者が彼の物語を非現実的な作品であると非難し、米軍のプレゼンス（軍事植民地化）の否定的な側面を見逃していると批判するかもしれない。しかし、彼の自国政府に対する政治的スタンスは非常に複雑である。『牡蠣一桶』が示しているように、台湾人を非民主的かつ無慈悲に扱っている国民党の圧政に対するアメリカの政治援助に対して批判的な立場をとっていることは疑いの余地がない。同時に、沖縄諸島の経済的自律性・持続性が明らかに不可能であった戦後の状況について彼は現実的な見識を持っていた。つまり、沖縄戦の目撃者としてスナイダーは、

戦場として荒廃した小さな島を見捨てるのは時期尚早だと考えており、米軍が沖縄のような小さな島を占有する限り、貧困に苦しむ地域経済を復興させる責任が米国政府にはあるという強い信念を持っていたはずである。『牡蠣一桶』執筆時に、彼はジャーナリズムの責任と民主主義の良心を信じて硬派なリアリストになったが、フィクションの力を信じて、二つの異なる文化的背景（アメリカとアジア）の相互理解を望む理想主義者でもあった。その意味で、ポストコロニアル理論が確立する以前から、スナイダーは脱植民地主義の意識・視点を持っていたのである。少なくとも、彼のアジア人（沖縄人・台湾人）の描写は、異文化をステレオタイプ的に描くオリエンタリズム的な作品とは明らかに一線を画していることを理解することは重要である。

3作とも共通して、アメリカ政府による十分な財政・経済援助と相互交流の改革・深化を要求している。米軍部隊が今後も沖縄に留まるつもりなら、在沖米軍関係者は彼の物語を読むべきであり、これらのフィクションから多くの示唆的な教訓を得ることができるだろう。地元の人々の日常生活よりも軍事的な論理を優先し続ける限り、在沖米軍駐留に対する地元の人々の理解を得ることはあり得ないことを認識する必要があるだろう。彼の物語は極東地域の脱植民地化を支援するテキストとして読むことができ、特に、『アシュタピュラからの王』は脱植民地主義の視点を持った物語であると結論づけることができる。

これら沖縄小説2作品に描写されているジェンダー問題に注目することも有意義である。男性中心の軍隊組織に所属したスナイダーが、女性の社会的地位に関する欲求や不満を提起し、1950年代の女性の状況を再考する作品を発表したことは驚くべきことである。例えば、『八月十五夜の茶屋』では、芸者が日本文化の象徴として登場し、西洋人の読者の性的想像力を刺激するという一方で、2人の芸者は、売春婦としてではなく、エンターテイナーとして描かれている。（ジューン・スナイダーによれば、スナイダーは、生前に芸者は売春婦ではないことを何度も強調していたという。）さらに、『アシュタピュラからの王』では、米軍人将校の妻たちによる養鶏経営への積極的融資や将来の女王になる予定のDebbieが自身のキャリアを切望する見解など女性への立場に対する苦悩や社会進出・参加の重要性が詳細に描写されており、これらのジェンダー問題を考察することは価値があると思われる。人種偏見と性差別の相関性・同質性を1950年代にスナイダーが既に看破していた可能性がある。

また、彼の3小説は旅行記（コンタクトゾーン言説）の一形態として読むことも意味があるだろう。ポストコロニアル理論以前、アジアに関する旅行記は、偏見に満ちた東洋観を持って、西洋の高度な技術でアジア人を文明化すること、植民地にキリスト教を導入して彼らの靈魂を救うこと、アジアにおける共産主義の拡大を防ぐこと、以前の植民地支配者からそれらの地域を脱植民地化することを正当化する、しばしば温情主義的なものになる傾向があった。しかし、彼の小説は、旅行記が持つ従来の傾向を脱構築した稀有な例と考えるべきだろう。2017年にCamphor Pressから再版された『八月十五夜の茶屋』の“Introduction”で、Larry McCafferyはこの物語の本質を指摘している。

While some of the basic elements of Teahouse's plot and characters . . . were fairly easily transformed for mainstream consumption, the essence of the Sneider's novel, and what made it so distinctive—that is, its intricate and highly original formal design, its flights of lyricism and beauty, its vivid and lovingly particularized presentation of Okinawan people, its surprisingly deep understanding of Okinawa's rich culture and its complex thousand-year-old history, its hilarious and relentless critique of intractable military logic and its nuanced (and surprisingly contemporary) treatment of ethical, racial, legal and economic issues relating to the American military's occupation of Okinawa—did not appear in either the Broadway play or film adaptation. (McCaffery “Vern Sneider's Reinvention” xvi)

この小説の本質とは、沖縄の豊かな文化やその複雑な千年の歴史に対する驚くほど深い理解、難解な軍事論理に対する容赦ない批判、米軍の沖縄占領に関連する倫理、人種、法律、経済の問題に対する驚くほど現代的なテーゼである。これらの重要なエッセンスは、その後の極東を舞台にした2つの小説にも受け継がれていることは明らかである。長く忘れ去られていた彼の小説は、ポストコロニアル状況の問題を先取りした先駆的な物語であり、学術的な注目に値する作品である。そして戦後80年近く、また日本復帰から50年以上経てもなおポストコロニアル状況下の現代の沖縄社会に極めて示唆的な啓示を与えてくれる作品群であると確信している。

台湾では『牡蠣一桶』が『一桶蚵仔』とタイトルで台湾語（2003）と中国語（2002）に翻訳され、近年注目を集めている。一方日本では、『八月十五夜の茶屋』（内村直也 訳1956）が長らく入手困難な状況であったが、2012年に『八月十五夜の茶屋: 沖縄占領統治1945』（梓澤登 訳）が再出版されている。映画『八月十五夜の茶屋』の日本国内でのDVD化や脱植民地主義のテキストとして『アシュタピュラからの王』を日本語訳を出版するなどスナイダー作品の正当な再評価を行う環境づくりが必要な時期にきているのではないだろうか。（モンロー郡歴史博物館には、彼の沖縄滞在体験をフィクション化した未発表の短編初稿が数編ある。『八月十五夜の茶屋』や『アシュタピュラからの王』の空想的なストーリーとは異なる極めてリアリスティックな作品である。これらの短編を読めば、スナイダーが持つファンタジー作家というイメージは払しょくされるだろう。）

## 引用文献

Benda, Jonathan. (2007) “Empathy and Its Others: The Voice of Asia, *A Pail of Oysters*, and the Empathetic Writing of Formosa” *Concentric: Literary and Cultural Studies*, 33.2. pp.35-60.

- . (2016) “Introduction” in Vern Sneider. *A Pail of Oysters*. Manchester: Camphor Press, pp. xi-xxxiii.
- Eldridge, D. Robert. (2002) “Report from Naha: The U. S. Consuls General and the ‘Okinawa Problem’ in the 1950s” 『国際公共政策研究』 7 (1) , pp.1-17.  
URL C:/Users/Owner/Documents/11-1\_n%20Thomas%20H,%20Murfin.pdf  
Accessed 2022/12/01.
- Jackson, Joseph Henry. “Bookman’s Notebook: A Novel of Today’s Formosa” p.27.
- Junkerman, John. (2013) “Postwar Okinawa Through American Eyes: Thoughts on The Teahouse of the August Moon” *GITS, GITI Research Bulletin*. pp.17-23.
- 川平朝申 (1997) 『終戦後の沖縄文化行政史』 那覇：月刊沖縄社。
- リップマン、ウォータ (1987) 『世論 (上)』 (掛川トミ子 訳) 東京：岩波書店。
- McCaffery, Larry. (2017) “Introduction: Vern Sneider’s Reinvention of the Novel: *The Teahouse of the August Moon*” in Vern Sneider. *The Teahouse of the August Moon*. Manchester: Camphor Press, pp. xi-xxxii.
- . (2018) “Riding a Galloping Horse with a Rotten Rein: The Art of Survival in Vern Sneider’s *The Teahouse of the August Moon*” 渡久山幸功 編 『沖縄を舞台にしたアメリカ小説の基礎的研究』 (科学研究費補助金研究成果報告書) pp.77-87.
- Rau, Santha Rama. (1953) “Intrigue in Formosa” *New York Times Book Review*. (September 27, 1953) p.4
- Sneider, Vern. (2017) *The Teahouse of the August Moon*. (1951) Manchester: Camphor Press, 2017.
- . (2016) *A Pail of Oysters*. (1953) . Manchester: Camphor Press, 2016.
- . (1960) *The King from Ashtabula*. New York: Putnum,1960.
- 渡久山幸功 (2015) 「沖縄を描いたヴァーン・スナイダーの故郷を訪ねて」 沖縄外国文学会機関誌 *Southern Review* No.30, pp.87-94.

**Monroe County Historical MuseumのSneider Collectionに所蔵されている資料**

- Sneider, Vern. “Career Account” Unpublished document.
- . “Draft entitled ‘For Gene Keene’” Unpublished document (July 12th, 1962) .
- . “Untitled Speech Draft” Unpublished document (November 5th, 1953) .

**謝辞**

本研究は科研費（研究課題番号26370322及び20K00442）の助成成果の一部である。